

非伝統的都市祝祭における空間利用の実態に関する研究

その1 高円寺阿波おどりを事例として

正会員 ○田中暁子*
正会員 中島伸**都市祝祭 商店街活性化 震災復興
空間利用 高円寺 阿波踊り

1. 研究の背景と目的

疲弊した商店街の活気を取り戻す手段の一つとして、祝祭開催による集客がある。都市の賑わいや活気、特にハレの日の賑わいは、人々を惹き付ける魅力となると考えられる。

本研究は各々の祝祭における都市空間の利用方法を分析し、各都市の空間的特徴を活かしながら祝祭による賑わいを創出する手法を明らかにすることを目的とする。

伝統的祝祭における都市空間の利用方法については既往研究がある⁽¹⁾。非伝統的都市祝祭については社会学分野で研究が行われているが⁽²⁾、その祝祭が行われる都市空間を分析した研究はない。

以上を鑑みて本研究では、戦後の東京で商店街振興を目的に開催されるようになった非伝統的都市祝祭（阿波おどり、よさこい祭り、サンバカーニバルなど）における都市空間利用の特徴を明らかにする。

本稿は、2008年8月23、24日に第52回目が開催された東京で最も歴史が古く、踊り手1万人、観客120万人を数える高円寺阿波おどり（杉並区）を対象に分析する。

2. 高円寺阿波踊り開催前史

(1) 時代背景

高円寺の隣街の阿佐ヶ谷南口商店街では「衣料品は阿佐ヶ谷で、食料品なら荻窪へ、本格的な買い物は新宿へ」という地元周辺の主婦の気持ちを取り去り、さらに他の土地からも客を呼寄せて、夏枯れといわれる八月の売れ行きの落るのを防ぐ⁽³⁾ために日本全国の夏祭りの視察を行い、1954（昭和29）年から「七夕まつり」が開催され、1958年に「地元の人達は新東京名物の一つと自賛しているが、千葉、埼玉、神奈川各県からも見物にくるそうだ」⁽⁴⁾と新聞報道されるほどに成功を収めた。

高円寺は空襲によって駅前の多くが焼け野原となり、1950年代には駅前に木造2階建ての店舗兼住宅の再建が進み活気を取り戻しつつあったが、震災を免れた荻窪や阿佐ヶ谷には引けをとっていた。加えて、高円寺北口駅前では、住民の反対が強かったために震災復興土地区画整理事業が進んでいなかった⁽⁵⁾。

このような状況の中で、同じ杉並区内の商店街である

阿佐ヶ谷の七夕祭への対抗意識から、1957（昭和32）年に高円寺南口商店街（現パル商店街）で東京初の阿波踊りが開催されることになった。

(2) 阿波踊りの選定理由

高円寺駅南口の高南商盛会（現高円寺パル商店街振興組合）では、二代目達を中心となって商店街を盛り立てていくために青年部が1957年8月13日に発足した。そして、月末にある地元の氷川神社のお祭りに合わせて発足記念の行事をすることになった⁽⁶⁾。

しかし、商店街の道幅が狭いため大きな神輿をかつぐことも、広場がないため盆踊りも出来ない。そこで、「広場は要らない。振り付けは簡単、通りを歩いて練っていただくだけでけっこう面白いそうだ」と、阿波踊りを開催することになった。

3. 高円寺の空間形成と祝祭の発展

約2週間の特訓の末、1957年8月27、28日に開催された第1回「高円寺ばか踊り」は南本通り（現高円寺パル商店街）の長仙寺に続く路地から桃園川まで、約250mのコースを踊り手38人がわずか5分で駆け抜けた。見物人は約2000人だった。

高南商盛会の一部反対（1959年）や、警察の道路使用許可の出し渋り（1960年）など、祝祭存続の危機を経つつ、東京深川・木場の徳島県人で組織する「木場連」に阿波踊りの指導を仰ぐ（1961年）など、阿波踊りが本格的になり、1963年の第七回に名称を「高円寺ばか踊り」から「高円寺阿波おどり」に変更した。

1965年にパル商店街の南側に接続するルック商店街も会場になり、青梅街道に至る800mにコースが延び、高南商盛会が単独で始めた阿波踊りは線的に広がった。

そして、1966年の第10回大会で高円寺駅南口広場、1967年には中央線の高架化によって南北往来の障害がなくなったので、高円寺北口の高円寺銀座商店街（現純情商店街）、1969年に駅前大通りである高南通り（都市計画道路補助227号）へと、高円寺駅南側の土地区画整理事業の進行と共に会場が面的広がりを見せた。

2007年8月25、26日に開催された第51回大会では、高円寺駅南口の商店街（パル、ルック第一、ルック第二）、

駅北口の商店街（純情、ひがし）、南口の駅前大通り（中央、桃園、高南、みなみ）に合計 9 の演舞場が設置された（図 1）。

パル商店街から始まった祝祭が、ルック、純情商店街へと広がり、さらには高南通りをメイン会場とするように、点から線へ、そして面へと拡大してきたのである。



図 1：高円寺阿波おどりのルート図

4.各演舞場が設置される街路空間の特徴

演舞場といっても、常に舞台と客席が設営されるのではなく、舞台に見立てた一般道や商店街を「連（踊りのグループ）」が踊りながら練り歩く。

幅員 18 メートルの駅前大通りにある中央演舞場、桃園演舞場、高南演舞場、みなみ演舞場は、車道を広々と舞台として使い、階段状の栈敷席が設置される。中央演舞場には審査席も設けられる。

純情、パル、ルック演舞場は、各々同名の商店街にある。これらの商店街は、戦前から南北を貫く一本の街路上に位置する歩行者優先の近隣商店街である。しかし、



写真 1：桃園演舞場

ルック商店街はルック・パル両商店街の境界付近を東西に流れる桃園川（現在は暗渠）に起因する南高北低の坂道、パル商店街は 1979 年に架けられたアーケード（2003 年新築）、純情商店街は狭い街路空間から北口駅前ロータリーの広々とした空間への連続性と、3 つの商店街の幅員はほぼ同じであるにもかかわらず、全く違った雰囲気



写真 2：ルック第一演舞場



写真 3：北口駅前ロータリー

ひがし演舞場は、戦災復興土地区画整理事業によって駅北口に整備された車道 2 車線、両側歩道の街路にある。踊り手は 2 車線を使って踊り、観客は車道と歩道の段差に座っても、その後ろに立ったままでもよい。



写真 4：ひがし演舞場

5.まとめ

高円寺では、祝祭が始まった当初は古くからの商店街が唯一のメイン通りだったが、1960 年代後半に駅前広場や駅前大通りが整備され、新たな街の顔が出来た。

現在では、この駅前大通りから高円寺駅に向かう中央演舞場をメイン会場としつつ、様々な特徴を持つ商店街に演舞場があり、様々な雰囲気の踊りを楽しむことが出来るようになっていく。

【参考・引用文献】

- (1) 山野信彦他（2002）「近代における東京の祭礼空間の変容に関する研究」, 都市計画論文集, vol.37, pp.661-666 など。
- (2) 松平誠（2008）「祭りのゆくえー都市祝祭新論」, 中央公論新社, 207p.など
- (3) 「飾りに“鉄人”も登場 阿佐ヶ谷七夕祭にぎわう」, 朝日新聞, 昭和 39 年 8 月 6 日
- (4) 「月おくれの七夕祭 阿佐ヶ谷南本通りで」, 朝日新聞, 昭和 33 年 8 月 6 日
- (5) 「もめる高円寺駅前の区画整理 “顔役が私利を企む？住民大会で強く反対」, 朝日新聞, 昭和 27 年 9 月 11 日
- (6) 高円寺阿波踊振興協会（2006）「踊れ高円寺 高円寺阿波おどり五十周年記念」, 東京阿波踊り振興協会

*東京大学先端科学技術研究センター 博士（工学）

**大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程

* Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Ph.D.

** Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering, The University of Tokyo